

青銅器の埋納位置の解読（その7）：未発見地の推定と金印埋納位置

吉田 薫

1. はじめに

弥生時代の青銅器の埋納位置についての検討を継続している。2022年度（2023.01）には「その6：埋納位置の選定」として、青銅器埋納位置、山頂位置及び神社位置の緯度・経度を用いて検討した結果を報告した。

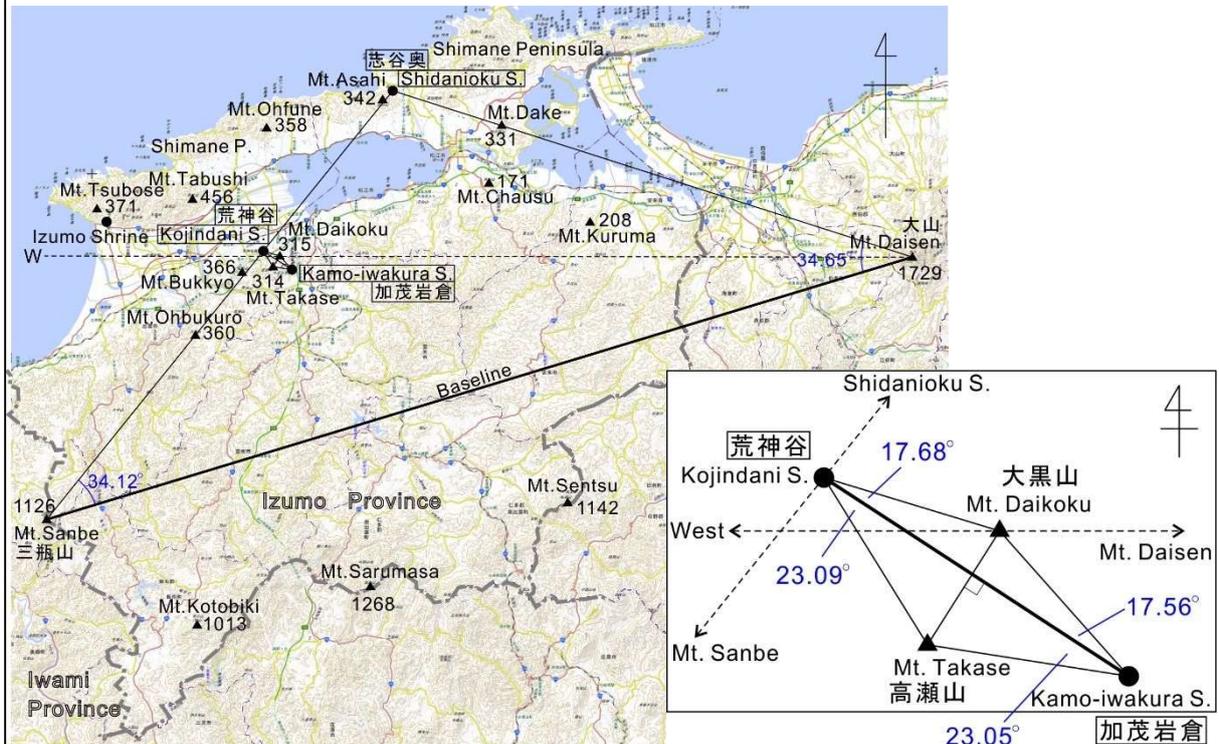
当報告については、古代における測量技術と地図の存在という視点で再構成し、英科学技術誌に投稿した。概要は次のとおりである。

Title : Traces of Ancient Surveying in Japan¹⁾（日本における古代の測量の痕跡）

国土の地理・地形を把握することは、いつの時代も国づくりにおいて最も重要な課題の一つです。古代出雲国では、大山と三瓶山がその明確な目印でした。一方、当国の志谷奥遺跡、荒神谷遺跡、加茂・岩倉遺跡からは多数の青銅器が出土しています。これらの青銅器は、西暦1世紀頃に埋納されました。

ランドマークとなる山々や青銅器遺跡の緯度経度（数値データ）を用いて相互関係を調べてみると、大山、三瓶山、志谷奥遺跡が大きな二等辺三角形を形成していることが分かります。また、2対として見える大黒山と高瀬山、荒神谷遺跡と加茂・岩倉遺跡が、共通の底辺を持つ2つの二等辺三角形を形成していることも分かります。

これらは、紀元1世紀の古代出雲国には、埋納地を選択するための地図と地図を作成するための測量技術があったことを示しています。現地で埋納地を示す測量技術もありました。これらは、証拠として示すことのできる日本最古の測量の痕跡です。



(英原文→グーグル翻訳・修正)



写真-1 大山と三瓶山

本稿においては、志谷奥遺跡に対応する青銅器の未発見地の推定及び志賀島の金印埋納地と周辺事物との位置関係等について述べる。

2. 志谷奥遺跡の位置

大山、三瓶山及び志谷奥遺跡の位置関係は次のとおりである。

冒頭図面 (Traces of ...) 及び表-3 によると、 \angle 志谷奥-大山-三瓶山 : 34.65° 、 \angle 志谷奥-三瓶山-大山 34.12° と、両角度はほぼ同じであり、 \triangle 大山-志谷奥-三瓶山は二等辺三角形といえる。つまり、大山-三瓶山を基線とし、その垂直二等分線上に志谷奥遺跡がある。そして、大山-志谷奥の線上には嵩山が、三瓶山-志谷奥の線上には荒神谷遺跡と大袋山、仏経山、朝日山東峰が位置する。

このことから、志谷奥遺跡の位置選定の手順は次のようであったと推察する。

埋納位置は、大山-三瓶山を基線とし、その垂直二等分線上の特異点とする。この垂直二等分線上には、大山-嵩山の線と三瓶山-大袋山-仏経山-朝日山東峰の線が交わる点がある。よって、ここを埋納位置とする。

この一連の作業には、前述のように各点の位置関係把握のための測量技術と相応の地図の存在が不可欠である。



写真-2 志谷奥遺跡と青銅器²⁾



写真-3 三瓶山山頂からの眺め

3. 未発見の青銅器埋納地

冒頭で示した図二葉 (Traces of) を見ると、大山-三瓶山、大黒山-高瀬山及び荒神谷遺跡-加茂岩倉遺跡が対となっていることが分かる。一方、志谷奥遺跡は単独である。ここで、志谷奥遺跡にも「対」となる対応点があるのではないかと、という疑念が生ずる。「ある」とすれば、それは志谷奥遺跡と同様に大山-三瓶山を結ぶ線の垂直二等分線上の特異点と考えられる。

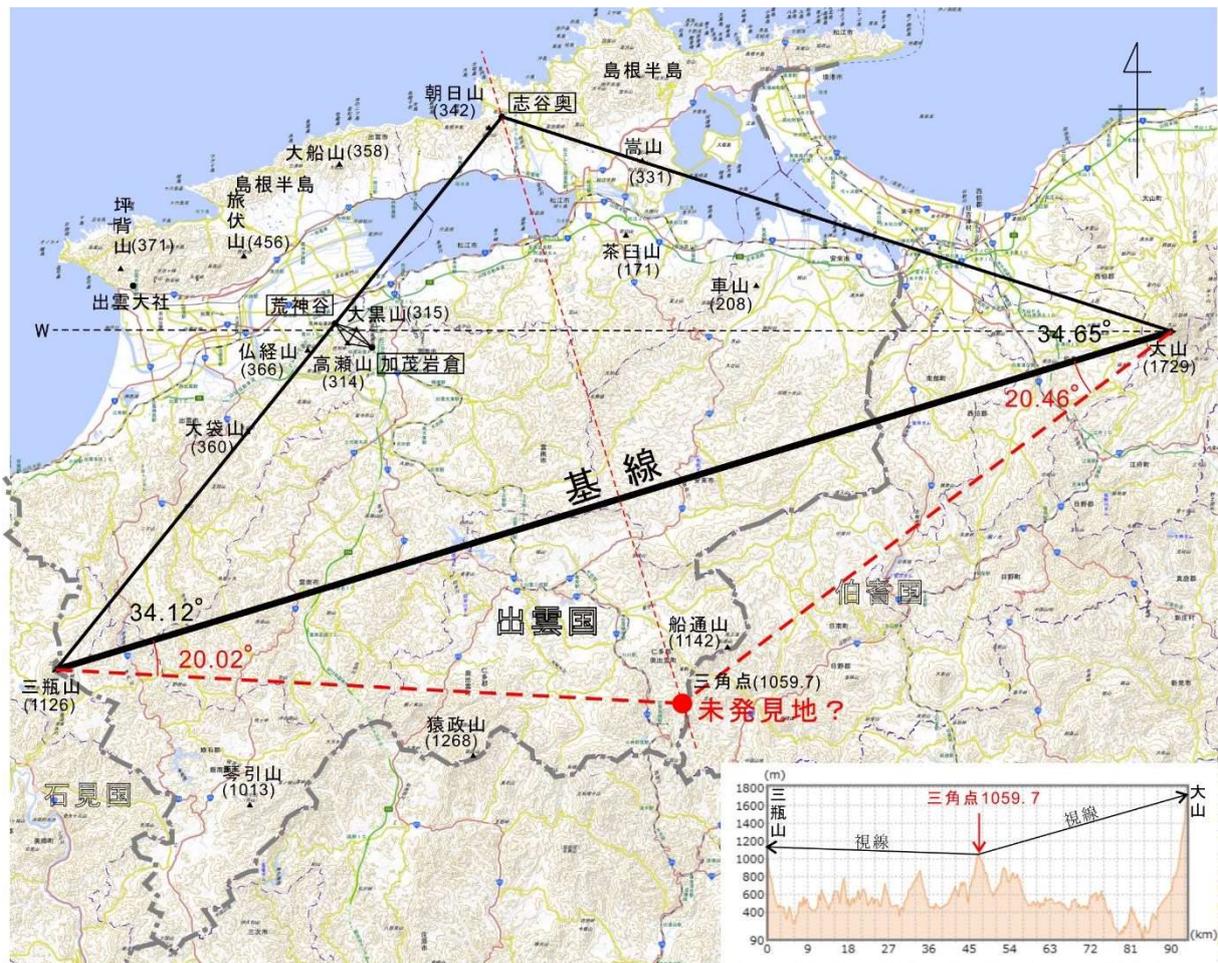


図-1 青銅器の未発見地

こうした観点で図-1を見ると、出雲国と伯耆国の国境（現島根・鳥取県境）の稜線上に、唯一、大山と三瓶山が見通せる峰がある。奥出雲町に位置するこの峰には三角点(1059.7m)が設置されているので、樹木が繁茂していない状態であれば見通しもある。

すなわち、こここそが志谷奥遺跡と対となる地点であり、未発見の青銅器が埋納されている可能性があるかと推察する。

表-1 各地点の座標値

位置	標高(m)	緯度			経度			座標根拠	備考
		度	分	秒	度	分	秒		
大山	1729	35	22	16	133	32	46	地理院山岳一覧	国引き神話
三瓶山	1126	35	8	26	132	37	18	地理院山岳一覧	国引き神話
志谷奥	—	35	31	2.0	132	59	28.8	島根県遺跡データベース	銅剣・銅鐙
未発見位置(四等三角点)	1059.7	35	7	5.8	133	8	25.4	三角点座標	奥出雲町鈿原奥

(注) ・図上計測は電子国土webによる。

表-2 二点の位置関係

位置関係	距離(km)	方位角
1) 大山－三瓶山	87.93	253.355194
2) 大山－志谷奥	52.91	288.000911
3) 三瓶山－大山	87.93	72.821569
4) 三瓶山－志谷奥	53.63	38.702153
5) 志谷奥－大山	52.91	107.679189
6) 志谷奥－三瓶山	53.63	218.915919
7) 大山－三角点	46.37	232.896083
8) 三瓶山－三角点	47.34	92.843242
9) 三角点－大山	46.37	52.661953
10) 三角点－三瓶山	47.34	273.141731

(注) 方位角は地理院計算サイトで求めた。

表-3 三点の位置関係

関係線	計算式	角度	備考
∠志谷奥－大山－三瓶	2)-1)	34.65	同角
∠志谷奥－三瓶山－大山	3)-4)	34.12	
∠大山－志谷奥－三瓶山	6)-5)	111.24	計180°
∠三瓶山－大山－三角点	1)-7)	20.46	同角
∠大山－三瓶山－三角点	8)-3)	20.02	
∠大山－三角点－三瓶山	360-10)+9)	139.52	計180°

4. 志賀島の金印

志賀島（しかのしま）は、博多湾の湾頭に位置し、古代における大陸・半島への海上交易の出発地であった。



図-2 志賀島の位置



写真-4 金印出土地付近に建てられた「漢委奴国王金印発光之处」の石碑と金印³⁾

志賀島の金印は、1辺 2.3cm、重さ 109g の金塊で、「漢委奴国王」と刻まれており、後漢の光武帝が西暦 57 年に贈ったものとされる。江戸時代の天明年間（1784 年ごろ）に、農民が田に水を引く溝を修理していたときに巨石の下から偶然発見した。

ただし、金印の発見者の詳細が不明なこと、金印を同定した儒学者・亀井南冥、届出を受理した役人・津田源次郎、金印を発見者から買い取った豪商・米屋才蔵の 3 人が旧知の仲であったことから、偽造説もある。（三浦祐之著『金印偽造事件』2006）



写真-5 志賀島遠望（唐泊崎より撮影）

金印出土位置については、木村俊晃氏（元土木研究所水文研究室長、日本における貯留関数法の開発者）の論考があり、金印出土地と近隣の神社位置等を結ぶと二等辺三角形が現れるとする⁴⁾。この発表が行われたのは 1984 年 6 月であり、同年 7 月の荒神谷の銅剣発見とは無関係である。

本稿では、木村氏が指摘する図形について、緯度経度を用いてその存在を検証する。

表-4 により各地点の座標値を示し、表-5 において 2 点間の方位角を求め、表-6 において 3 点の位置関係を表した。

図-3 及び表-6 によると、△金印出土地－沖津宮－潮見台の両底角は 34.53° 及び 32.48° であり、明確な二等辺三角形とは言い難い。これは、潮見台のピークが確認しづらく、便宜上、三角点を選定していることが影響しているかもしれない。反面、△金印出土地－沖

津宮－大嶽神社は両底角が 32.22°と 33.02°であり、二等辺三角形と認識できる。



図-3 志賀島の金印出土地

表-4 各地点の座標値

	標高 (m)	緯度			経度			座標根拠	備考
		度	分	秒	度	分	秒		
沖津宮	14	33	41	20	130	17	25	図上表示、図上計測	沖津島
潮見台	168.9	33	40	41	130	18	24	図上表示、図上計測	三角点
金印出土地	—	33	39	37	130	18	3	図上計測	推定位置
大嶽神社	41	33	39	23	130	20	8	図上表示、図上計測	大岳

(注) 図上表示・図上計測は電子国土webによる。

表-5 二点の位置関係

位置関係	距離 (km)	方位角
1) 沖津宮－金印	3.32	162.854258
2) 沖津宮－潮見台	1.94	128.328622
3) 沖津宮－大嶽神社	5.53	130.633400
4) 潮見台－金印	2.04	195.343647
5) 潮見台－沖津宮	1.94	308.337711
6) 金印－沖津宮	3.32	342.860111
7) 金印－潮見台	2.04	15.340411
8) 金印－大嶽神社	3.25	97.618733
9) 大嶽神社－沖津宮	5.53	310.658503
10) 大嶽神社－金印	3.25	277.637978

(注) 方位角は地理院計算サイトで求めた。

表-6 三点の位置関係

関係線	計算式	角度	備考
∠金印－沖津宮－潮見台	1)-2)	34.53	同角？
∠潮見台－金印－沖津宮	360-6)+7)	32.48	
∠沖津宮－潮見台－金印	5)-4)	112.99	計180°
∠金印－沖津宮－大嶽神社	1)-3)	32.22	同角
∠金印－大嶽神社－沖津宮	9)-10)	33.02	
∠沖津宮－金印－大嶽神社	360-6)+8)	114.76	計180°

志賀島の金印出土地と周辺の島や丘陵にある神社等との位置関係は、前述した出雲国における青銅器埋納位置とランドマークの山々との関係と同様である。金印が授与されたのは西暦 57 年、出雲国において青銅器が埋納されたのは 1 世紀頃²⁾とされるので、埋納理由や埋納時期は、ほぼ同様だと推察する。

したがって、本稿は次の理由により金印偽造説には与しない。

- ・ 出雲国の青銅器埋納位置と同じように金印埋納地位置が選定されている。
- ・ 金印の偽造は可能でも、埋納のため上述のような有意の場所を選定したとは考え難い。
なお、木村氏は、さらに深掘りして線長、他図形、エジプト幾何学との関連等について言及している。

5. 青銅器埋納と金印埋納

(1) 青銅器埋納

大山の麓には大神山（おおかみやま）神社、三瓶山の麓には佐比賈山（さひめやま）神社がある。それぞれの祭神及び伝説は次のとおりである。

a. 大山

○大神山神社奥宮

祭神：大己貴命（オオナムチノミコト、大己貴神、大国主命）

昔、大己貴命、少彦彦名命（スクナヒコナノミコト）、須勢理姫命（スセリヒメノミコト）が大神山（大山）の山頂に立って国土を見下ろし、国造りを相談したと伝わる。

b. 三瓶山

○佐比賈山神社

祭神：大己貴命、少彦彦名命、須勢理姫命

○三瓶山（みかめやま）神社（明治8年に佐比賈山神社から改称）

祭神：大己貴命、少彦彦名命、八束水臣津野命（ヤツカミズオミツヌノミコト）

両社とも三瓶山の麓に位置し、式内社の論社となっている。

以上をまとめると、次のようになる。

大山及び三瓶山ともに国造りに関わる神々が祀られている。国引きを顕彰するのであれば八束水臣津野命が前面に押し出されるべきだが、そうはなっていない。三神社に共通する点は、大己貴命及び少彦彦名命である。また、同時代の須勢理姫の名が出てくるのは首肯できる。

話を端折るが、神社の名称から判断すれば、大神は大己貴命（大国主命）である。少彦彦名命は大己貴命の国造りを補助した神。須勢理姫は、須佐之男命の娘で大己貴命の妻。夫婦を「対」の関係とすれば、名称由来が不明とされる佐比賈（サヒメ）とは「須佐の姫」と結びつく。これが、大神山（大山）と佐比賈山（三瓶山）の「対」関係ではないか。

また、大山及び三瓶山が青銅器埋納と関係があるとすると、“国土の地鎮”や“護国の呪い（まじない）”が思い浮かぶ。

(2) 金印埋納

沖津宮及び大嶽神社は、いずれも志賀海神社の境外摂社である。

沖津宮には、表津綿津見神（ウハツワタツミノカミ）と天御中主神（アメノミナカヌシノカミ）が祀られている。表津綿津見神は、海の表を守る神様とされ、天御中主神様は宇宙の中央に在る最高神とされる。一方、大嶽神社には、志那津比古神、志那津比売神、大浜宿禰及び保食神が祀られている。志那津比古神と志那津比売神は、風の神様である。

つまり、海や航海に関わる神々が祀られているが、金印埋納との関係は不明である。

6. 嫁ケ島と少彦名命

(1) 位置関係

青銅器が埋納された弥生時代には、二等辺三角形や直角三角形などにより相対的な位置決めがされていたのではないかと、ということをも本稿及び既稿において多数例示した。本パートは、嫁ケ島の神社もその範疇にあるのではないかと、という内容である。

毎年10月に行われる嫁ケ島イベント時のボランティアガイドを10数年務めている。渡島者に対し、島の事物や島から見える風景などについて解説する。ただし、説明はするのだが次の疑問が頭を離れない。

島の竹生島神社（祭神：市杵島姫命、通称：弁天祠）は、江戸時代の初めに堀尾公が広島宮島の宮島から勧請したとされる。しかし、出雲国風土記（略：風土記）に記載されるほど目立つ島（名称：蚊島）に、それまで他の神を祀ってなかったのか、ということである。

付近の同様な小島を調べてみると、次のようである。

- | | | |
|------------------|--------|-----------------|
| 粟島（風土記：粟島、米子市） | ：粟島神社 | ・・・祭神：少名彦命 |
| 羽島（風土記：羽島、安来市） | ：羽島神社 | ・・・祭神：大国主命、少彦名命 |
| 塩楯島（風土記：塩楯島、大橋川） | ：手間天神社 | ・・・祭神：少彦名命 |

いずれの島も出雲国風土記（733年）に記載されており、共通して少彦名命が祀られている。小島には少彦名命を祀るということならば、嫁ケ島も同様ではなかったのか。今次、嫁ケ島と各神社の位置関係を調べてみた。

ホームページ「八百万の神」によると、宍道湖東岸～中海周辺にかけて少彦名命を祀る神社は9社ある。名称と位置を下記に示す。

（「八百万の神」<https://yaokami.jp/>）

粟嶋神社（粟島、米子市）、羽島神社（羽島、安来市）、貴布禰神社（安来市、合祀）、揖屋神社（松江市、配祀）、手間天神社（塩楯島、松江市）、天神神社（松江市）、白瀧天満宮（松江市、配祀）、野代神社（松江市、合祀、堀尾氏が広瀬より奉遷）、阿羅波比神社（松江市、毛利氏が洗合山より移設）。

（注）合祀及び配祀は、少彦名命が主祭神ではない。図-4では×で示す。



図-4 少彦名命を祀る神社

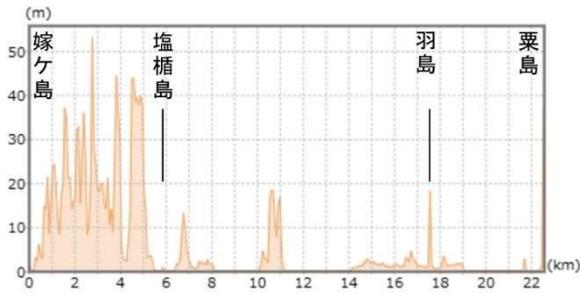


図-5 嫁ヶ島－塩楯島－羽島－粟島の見通し

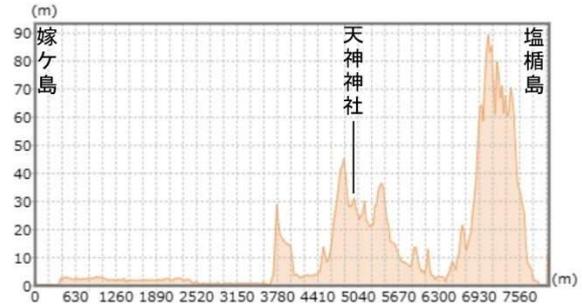


図-6 嫁ヶ島－天神神社－塩楯島の見通し

表-7 嫁ヶ島周囲の座標と位置関係

	標高 (m)	緯度			経度			高さ及び座標根拠	祭神等
		度	分	秒	度	分	秒		
粟島(粟嶋神社)	36	35	26	38	133	17	32	図上読取、図上計測	少彦名命
羽島(羽島神社)	20	35	26	7	133	14	18	図上読取、図上計測	大国主命、少彦名命
塩楯島(手間天神社)	13	35	26	58	133	6	38	図上計測	少彦名命
嫁ヶ島(竹生島神社)	1	35	27	22	133	2	47	図上計測	市杵島姫命(弁財天)
天神神社	32	35	28	27	133	5	48	図上計測	少彦名命、仁徳天皇

表-8 二点の位置関係

位置関係	距離 (m)	方位角
1) 塩楯島－天神神社	3,020	335.319025
2) 塩楯島－嫁ヶ島	5,870	277.255050
3) 天神神社－塩楯島	3,020	155.310967
4) 天神神社－嫁ヶ島	4,980	246.315122
5) 嫁ヶ島－塩楯島	5,870	97.217831
6) 嫁ヶ島－天神神社	4,980	66.285853
7) 羽島－塩楯島	11,710	277.752525
8) 羽島－嫁ヶ島	17,580	277.611106

(注)方位角は地理院計算サイトで求めた。

表-9 三点の位置関係

関係線	計算式	角度	備考
∠塩楯島－天神神社－嫁ヶ島	4)-3)	91.00	≒直角
∠天神神社－塩楯島－嫁ヶ島	1)-2)	58.06	Total
∠塩楯島－嫁ヶ島－天神神社	5)-6)	30.93	≒180°
∠羽島－塩楯島－嫁ヶ島	7)-8)	0.14	≒直線

図-4 及び表-7,8,9 により、各島・各神社の位置関係を求めると、羽島－塩楯島－嫁ヶ島が直線に並ぶ。また、塩楯島－天神神社（祭神：少彦名命、仁徳天皇）－嫁ヶ島が概ね直角三角形を形成する。前者は自然の妙だが、後者は人為である。

△塩楯島－天神神社－嫁ヶ島の角度を、緯度経度をもとに求めると 91.00°-58.06°-30.93°となる。測量誤差や設置位置の事情等を考慮すれば、90°-60°-30°の直角三角形と考えることができる。まとめると次のようになる。

- ① 嫁ヶ島には江戸時代初頭に勧請された竹生島神社があるが、出雲国風土記に載るほど目立つ島に、それ以前は祭神がなかったと考えるのは不自然である。
- ② 近隣の小島である粟島、羽島、塩楯島には少彦名命が祀られている。嫁ヶ島にも元は少彦名命が祀られていたのではないかと推察される。
- ③ 少彦名命を祀る塩楯島－天神神社－嫁ヶ島の三者で直角三角形（90°-60°-30°）を形成する。

以上より本稿は、嫁ヶ島にはもともと少彦名命が祀られていたと推察する。

なお、図-5,6 のように、嫁ヶ島－塩楯島－羽島、嫁ヶ島－天神神社－塩楯島の直接の見通しは利かず、ここでも青銅器埋納時と同様な測量方法が用いられたと考える。



嫁ケ島(風土記：蚊島)



塩楯島



羽島



栗島

写真-6 出雲国風土記にも載る4つの小島

(2) 奉遷の経緯

嫁ケ島の現在の祭神は市杵島姫命（弁財天）である。どのような経緯があったのだろうか。近くの白瀉天満宮では、主祭神は菅原道真、配祀神は少彦名命となっている。由緒書には、「保元年間に出雲国に赴任した平景清が眼病にかかり菅公に祈ったところ全快したので鎮守として富田城内に社殿を建立して祀った。後、堀尾公が富田（広瀬町）から松江に城を移すときに当社も奉遷された」とある。

荒木英信著『松江八百八町町内物語』は、「天神様が眼病の神様とは奇っ怪な話だが・・・」とする⁵⁾。菅原道真は「学問の神」として信仰が厚いのに対し、少彦名命は「医薬の神」である。平景清が祈願し、堀尾氏が遷したのは少彦名命を祀る神社ではなかったのか、という疑念が湧く。ただし、平景清の話は全国に流布しているので創作の可能性もある。

歴史として認識される富田城の初代城主は鎌倉時代の佐々木義清（宇治川の先陣争いで有名な佐々木高綱の弟）である。佐々木氏の本貫地は近江であり、氏神社は沙沙貴神社。ここの祭神は少彦名神、大毘古神、仁徳天皇、宇多天皇、敦実親王となっている。これとは別に、少彦名命を祀る神社としては、人形供養や婦人病祈願の和歌山市加太の淡島神社（祭神：少彦名命、大己貴命、神功皇后）が著名である。

一方、広瀬町にある富田八幡宮の主祭神は応神天皇、配祀神は天照大御神、神功皇后、仁徳天皇である。詳細は省くが、沙沙貴神社及び淡島神社と比較すると少彦名命が抜けている。つまり、堀尾公が広瀬から松江に遷したのは「少彦名命」ではなかっただろうか。堀尾吉晴は三河国池鯉鮒での事件で重傷を負っている。平癒祈願のため医薬の神である少彦名命を松江の白瀉天満宮に遷し、嫁ケ島の少彦名命を合わせるとともに菅公を勧請し、空いた嫁ケ島には弁財天（竹生島神社）を勧請したと考えると話の筋が通る。

参考文献

- 1) K. Yoshida, Traces of Ancient Surveying in Japan, Transactions on Engineering and Computing Sciences, Services for Science and Education, United Kingdom, Vol. 12 No. 3, pp.88-100, 2024.
- 2) 島根県教育委員会・朝日新聞社, 古代出雲 神の国の永遠の遺産展, p.56, p.260, 1997.
- 3) 福岡市博物館ホームページ資料
- 4) 木村俊晃, 古代地域計画の原理その3 幾何図形論—金印の島のピラミッド図形—, 第4回日本土木史研究発表会論文集, 土木学会, pp132-142, 1984.
- 5) 荒木英信, 松江八百八町町内物語 白瀉の巻, pp157-158, 1955